

＜書評論文＞

第2電子メディア時代の コミュニケーションと 「主体」

—インターネットと
ポストモダンティー—

Mark Poster,
The Second Media Age.
(Polity Press, 1995)

村上浩介

ここ数年、我々を取りまく環境に、新しいメディアが急速に浸透してきている。インターネットをはじめとするコンピュータ・ブーム、携帯電話・PHSといった移動電話の普及などがその典型例である。こうした技術環境の変化が、我々自身の感覚に、また我々のコミュニケーションにどのような変化をもたらすのか。これは、以前から多くの社会学者が「技術と文化の問題」として論じてきたものであるが、昨今の急速な技術の進展に議論が追いついていない感があり、現象の単なる記述の域を越え、理論的に検討している文献は数少ない⁽¹⁾。そのような状況の中、従来の議論を

⁽¹⁾その例外として、今田高俊編『ハイパー・リアリティの世界』(1994)、大澤真幸『電子メディア論』(1995)などが挙げられるが、従来の議論の整理や政治的実践を扱っている点で、ポスターの議論はユニークな位置を占めているといえる。

整理・検討し、新たなパラダイムを導入して現状を批判的に認識しようと試みているのが、本書の著者、マーク・ポスターである。

ポスターは、カリフォルニア大学アーバイン校の批判理論研究所の歴史学教授である。ポスターの電子メディアに関する議論は、1990年に発表された“The Mode of Information”(邦訳『情報様式論』(1991)、以下『情報様式論』と表記)で既に知られるところであるが、本書はその次作である。本書は、『情報様式論』以降の1991年から1995年の間に書かれた論文を集成したものであり、従来の議論の検討と自らが拠って立つ理論的視座との関係、『情報様式論』以降の電子メディア環境の変化、また『情報様式論』ではその示唆にとどまっていた電子メディアとポストモダンの政治学との関係などを論じた、いわば『情報様式論』の補遺的著作である。そこで本稿では、『情報様式論』との連続性を重視し、本書をポスターの電子メディアについての議論全体のなかに位置づけた上で、まずポスターの理論的視座を、続いてそれに基づく既存理論の批判的検討、電子メディアの政治的可能性の検討、メディア環境の分析を紹介した後、ポスターの議論の可能性を論じる⁽²⁾。

1 ポスターの理論的視座

ポスターは、自らの議論を「批判的社会理論」と呼ぶ。これは、フランクフルト学派やゲールドナーらの議論の伝統に直接くみする

⁽²⁾なお、『岩波講座 現代思想13 テクノロジーの思想』(岩波書店、1994)中に既に翻訳されている第5論文「ディスクールとしてのデータベース」、及び事例分析である第2部「メディア」に含まれる4つの論文の紹介は、本稿では紙幅の都合上割愛する。

ものではなく、「今現れつつある社会形成の批判的理解」(『情報様式論』p.149)を目指す試みである。具体的には、電子メディアの普及・浸透による「コミュニケーションのパターンにおける変化が主体における変化を含んでいるそのあり方について探究」(同、p.19)するものである。これを、ポスト構造主義のテーマ「主体がコミュニケーションの行為と構造の中で構築される」(同、p.19)に基づき、社会的コンテクスト＝現実の状況に即して考察するのがポスターの戦略である。すなわち、ポスト構造主義の視点に基づき、現実のコミュニケーション、およびそれをめぐる状況に関する批判的理論・認識枠組を展開・提供するものといえよう。

これを論じたのが、本書第1部「理論的再考」に含まれる6本の論文である。まず第1論文「社会理論とニューメディア」で、新しい電子メディアの一般的な特徴と、それに基づく従来のメディア論批判、そして自らの視座の有効性が論じられている。ここでは、『情報様式論』の議論と併せ、ポスターの基本的立場を紹介する。

ポスターによれば、電子メディアはその情報伝達様式で2つの種類に分けることができる。1つは、少数の生産者＝発信者から多数の消費者＝受信者へ情報が送られるという「垂直モデル」で、この典型はTVやラジオのような放送メディアである。これに対し、現在急速に浸透しているインターネットなどの「情報ハイウェイ」や、TV・コンピュータ・電話を衛星技術で統合するマルチメディアでは、生産者＝発信者と消費者＝受信者が互換的＝双一多方向的であり、その区別が無効となる。この「水平モデル」のメディアが登場してくる時代、この現在を“The Second Media Age”と呼ぶ^③。従って、これ以前の「垂直モデル」

メディア時代は“The First Media Age”と呼ばれる^④。コミュニケーションが主体を作り出す様式をみるためには、現実には混在している両者を分析的に区別・相対化し、歴史的環境要因＝社会的コンテクストとしての両者の配置をみる必要があるとなる。

この「第2メディア時代」のコミュニケーションによって構成される主体は、近代社会で前提とされた自律的・合理的な確固たる主体とは異質な、「脱中心化され、散乱し、連続的な不確実性の中で多数化されている」(『情報様式論』p.11)ものである。これは、ポスト構造主義の思想家によって暴き出された主体の姿である。社会を批判的に認識するためには、この主体像を認識している必要がある。この点から、従来の近代的主体像に基づく議論を批判し、それに代わる新しい認識視座を展開していくのが本書の目的である。

2 従来のメディア・社会理論の批判的検討とポスト構造主義

前述のような「ポストモダンな主体」という認識を基に、ポスターは従来の社会学的議論を批判的に検討する。具体的には、前述の第1論文に加え、第3論文「ポストモダン

^③なお、電話というメディアは、時代的には第1メディアに属するが、脱中心的、双方向的という第2メディアに近い特徴を持つ、両者の中間的なものとして位置づけられている。

^④『情報様式論』では、情報様式の3つの段階として、「対面し、声に媒介された交換」「印刷物によって媒介される書き言葉による交換」「電子メディアによる交換」を分析的に区分している(p.11,148-164)。本書の「第1メディア/第2メディア」の区分は、この情報様式の3段階目をさらに精緻化したものであると考えられる。

ティ、および多文化主義の政治学」、および第6論文「批判的理論とテクノカルチャー：ハーバーマスとボードリヤール」で、メディアに関する認識の変遷を追いながら、個々の理論家の議論の不十分な点を指摘している。ここではそれを簡略化して紹介する。

まず、「メディア＝世俗」という、人文科学系の知識人に多く見られるネガティブな視点は、「自らの「文化」を高くみるインテリ」の偏見であるとして批判される。この議論の系統に位置づけられるのが、メディアを一義的にネガティブなものとしてとらえる傾向にある従来の批判理論の理論家たちである。「新しい技術が人間の自律性を堕落させる」としてメディア・文化産業を批判したアドルノとホルクハイマー、学派は異なるがメディアを「国家のイデオロギー装置」とみてその権力作用を警戒したアルチュセール、メディアは「システム（＝技術）による生活世界（＝文化、公共空間）の植民地化」を促進するとして批判したハーバーマスなどである。これらの議論は「自律的な近代的主体／操作される大衆」という二分法や、技術が社会を改悪するという技術決定論に陥っており、現況を捉えるには不十分であるとされる。また、これとは逆にメディアを一義的にポジティブにみる視点も、同様に批判される。メディアが進歩的に自由・平等な主体をつくるとしたエンツェンスベルガーも、やはり単純な決定論に陥っている。ネガティブ／ポジティブの両議論とも部分的には真実を鋭くついているが、両者とも近代的主体を前提としており、「メディアによる文化変容の意義」を十分にとらえているとはいえない。

このような議論が多い中、ポスターはベンヤミンの議論を高く評価する。ベンヤミンは、「メディアの可能性は、それが現実化される

方法・文脈によって決定される」として、二項対立的な見方や技術決定論を否定する。そして「メディアは文化の中で技術が実体化する様式であり、メディア自体が問題のあるものではない」という立場から、複製技術・映画など様々なメディアの影響から生じる文化の変容が、反権威的・現状批判的な可能性を持ち得ると論ずる。ただし、こうしたメディアにより人々の受動性が増大する危険性を指摘することも忘れない。こうして、現実の局面における権力作用の文脈で、メディアが持つ自由・平等化作用の可能性が議論されるのである。

しかし、これらの議論はいずれも第1メディアの段階にとどまっている。この段階を越え、第2メディアについて示唆しているのがボードリヤールである。ボードリヤールは、メディアが提示する「シミュレーション」の世界、つまり自己指示的で参照するシニフィエを持たない「浮遊するシニフィアン」の世界を「ハイパー・リアリティ」と呼び、この段階に至ると、人間はもはやリアリティの中心点＝主体ではなく、メディアに操作される対象としての客体となっている、と見る。しかしポスターは、こうしたボードリヤールの議論は近代的主体を解体したもの、結局は近代的二分法の「主体／客体」図式に陥ってしまっており、技術決定論的な議論になっている、と不十分さを指摘する。しかし、ドゥルーズ、ガタリ、ハラウェイらポストモダンの思想家たちは、この議論の限界を乗り越えている。特にガタリの議論は、「人間／機械」の二分法を破壊しているため、「インターフェース」⁽⁴⁾という新しい問題域の理解に適している、と高く評価されている。

こうした議論の展開をふまえ、社会を批判的に認識できる視点として、ポスターは第1

論文で2つの戦略を挙げている。1つめは、ポスト構造主義の立場での「言語論的転回」である。行為、制度の分析から言語、コミュニケーションの分析への転回。そして、主体を形成・構成するものとして、言語をみることに。これにより、近代的主体は解体される。2つめは、こうした解釈的スタンスを、電子のコミュニケーションに応用して、現在の局面に特有な「主体構成のパターン」を批判的に探ることである。ここで、ポスターは批判的社会理論へのポスト構造主義の導入を宣言する。そしてこの新しいパラダイムに基づいて、第2メディア、およびその環境を分析するのである。

3 第2メディアの政治的可能性

上述のような理論的視座を背景にして、ポスターは第2メディアの政治的可能性について論じる。第2論文「ポストモダンの仮定性」、および第3論文「ポストモダニティ、および多文化主義の政治学」がそれである。

従来のメディアに関する議論は、大別すると上述のようなネガティブなもの（アドルノ、ハーバーマス、ジェイムソン）に共通するのは「近代的主体喪失の悲嘆」であり、ポジティブなもの（ベンヤミン、エンツェンスベルガー、マクルーハン）に共通するのは「民主主義の可能性への期待」である。ここでは、近代的主体が解体する（もしくは、最初からそれが虚構である）ことを前

提に、後者について議論されている。

ポスターは、電子メディアが果たす両義的な役割を指摘する。現在の電子メディア環境は、現存する権力構造を強化する働きを持っている。国家－文化の権力構造による言語的制約に加え、個人間の権力構造、つまり装置にアクセスできる裕福さや、装置を使うことができる能力・学習機会の差のために、インターネットは白人男性のものとなっている傾向がある。しかし、こうしたインターネットで形成される「サイバースペース」では、別の現実が展開されている。サイバースペースとは、複数の参加者が、その参加者全体とメッセージをやり取りし合う、電子掲示板・ニュースグループなどと呼ばれる「仮想的」な空間をさす。ここでは、多数の参加者が物理的な制限を越えて距離0の空間を形成し、社会的属性とは無関係な架空の属性を自由に持つことができる。しかも個人は身体的には認識されない。ここにポスターは、現実と与えられているエスニシティ・ジェンダーなどの差異を、また差異化すること自体を無効化する「反本質主義」の可能性を見いだすのである。つまり、現実のコミュニティやエスニシティ、ジェンダーといった概念の想像性を指摘するために、仮想的なサイバースペースという空間が有効であるとする。メディアを「主体形成」という観点から論じることで、第2メディアは「近代が近代的主体を形成し、かつその形成過程を隠蔽してきた」ことを暴露するものとなる。そしてポスターは、現実の文脈でメディアをみることによってポストモダンの政治的実践を目ざす。今までのポスト構造主義が結果として実践を軽視してきたことを批判しながら。

こうしたサイバースペースは主に、そこでのコミュニケーションの特徴とされる相互対

⁽⁵⁾ここで使われているインターフェースとは、「人間と機械の接触面・中間領域」を指す、特に「マン・マシン・インターフェース」と呼ばれるもののことであろう。

話性＝interactivityから、新たなコミュニティの可能性、具体的には衰退しつつある現実のコミュニティの代替物として論じられてきたが、ポスターはこの論調に対して慎重である。既に社会学・人類学で常識となっている、国家、民族といった現存するコミュニティの「想像」性から、「現実／仮想」という区別自体が既に問題であり、それを前提とせず、それにとらわれないように議論する必要がある、という。

4 第2メディア・コミュニケーションによる主体の形成

では、ポスターは、第2メディアによる主体形成をどのようにとらえているか。

第4論文「情報様式とポストモダンティ」では、TVCM、データベース、コンピュータによるコミュニケーションを、それぞれボードリヤール、フーコー、デリダの理論と関連させて論じている。これは『情報様式論』の第2、3、4章と全く同じ構成であるので、ここでは新しいメディア技術の進展をフォローしている「コンピュータによるコミュニケーション」についてのみ紹介する。

デリダは、従来の二分法「話し言葉＝パロール／書き言葉＝エクリチュール」を否定し、メッセージ発信者の特権的地位を解体して、書き言葉の議論を展開する。しかしポスターは、コンピュータによるメッセージのやり取りは、さらにラディカルであるとする。電子コミュニケーションでは、書き言葉同様、メッセージの発信者と受信者の間の物理的な「現前性」はないが、話し言葉のように、距離0の空間が仮想的にはあるが形成されている。ここでは、相手の現前／非現前という区別はもはや無効であり、話し言葉／書き言葉とい

う分類で語ることはできない。また、ハイパーテキストという新しい文書形式は、他の文書への直接的な参照＝リンクを含むことができるため、他者の文章も自分のテキストの一部とすることが可能である。さらに、メッセージはリゾーム的にやり取りされ、その過程で自己指示的に次々と引用・加工される。ここに、著者の複数性が成立する。前述のように、サイバースペースで自己の属性を変えることもできる。主体の複数性、流動性、脱中心性—ここでも、自律的主体の解体が指摘されるのである。

これらの議論から以下の結論が導き出される。ポスト構造主義が明らかにしたように、「脱中心的・複数的・流動的な主体」を「自律的・合理的な主体」へと形成するのが近代の作用であるとする、それとは逆の方向、つまりその脱中心性・複数性・流動性を増幅・促進する方向へ、第2メディアは主体を形成する。同時に、言語の自己指示性を拡大することにより、「独自のリアリティを持つ自己指示的世界」をも構成するのである。これが果たす役割は、現実の文脈の中で決定される。それを批判的に認識し、問い直し続けること—これがポスターの一貫した理論的・実践的立場である。

5 電子メディアと感情・身体—ポスターの議論の可能性

以上が、2冊の著書から評者なりに解釈した、ポスターの理論的視座とそれに基づく分析である。これをふまえて、ポスターの議論の問題点、あるいは展開の可能性について論じてみたい⁶⁾。

ポスターは、本書を通して、新しい電子メディアによる近代的主体の変容を論じ、それ

が反本質主義の可能性を持っていることを指摘した。反本質主義という具体的な展望を明確に示すことで、コミュニケーション論・メディア論とポスト構造主義の議論とが、「批判的社会理論という実践」のレベルで接続される。本書の非常に幅広い問題設定は、ポスターの具体的な展望、またその議論の可能性の広がりを見せているといえよう。

しかし、私見では、ポスターの議論には2つの問題点が指摘される。その第1点は、電子メディア環境が、既に我々の周りの世界に浸透してしまっている状況を想定して議論をしている点である。実際には、こうしたメディア環境は徐々に我々の周りに浸透していくのであり、その経過を見ることは、主体の変容の経過を知るのに不可欠であると思われる。

我々をこうしたメディア環境に巻き込んでいくのは、「インターネットができないと時代に乗り遅れる」というような、パノプティコン的＝自己規律化的なディスクールであろう。しかし、こうしたディスクールは、全体としてはメディア環境の拡大を志向しているが、メディア間・メディア内での利用者獲得をめぐる熾烈な争いにみられるように、個々のレベルではますます多様化している。また、ヴィトゲンシュタインやデリダが明らかにしているように、ディスクール＝メッセージが、発信者＝メディア側の意図通りに受信されるか否かは発信者側の知るところではなく、そ

の受信のされ方も個人によって大きく異なる。ここから、こうしたメッセージは比較的社会性の強い言語的水準よりも、個別性が強い感覚的・身体的水準においてより強く作用している、と考えられる。「マッサージ」としてメッセージを読み取ることによって、つまり感覚的・身体的にある体験をすることによって、そのメッセージ（この場合はメディア）の世界に入っていくのである⁷⁾。

こうしたメッセージの受容を典型的に示しているのが、若者が広く使用している言葉「ハマる」である。ある対象に魅かれ、とらわれるようにそれに熱中する—ここには「主体／客体」という確固とした区別は存在しない。この「ハマリ」は偶然やってくるもので、しかも個人によって何に「ハマる」かは異なる。インターネットなどのメディアが日常化してしまっている人の多くは、メディアが提供する何に「ハマ」ったかはともかくも、メディアに「ハマ」ってしまった人であろう。このようにしてメディアは浸透していくが、その個人的／社会的な浸透が深くなり日常化していくにつれて、そのメディアは言語＝道具として、感情や身体から切り離されて体験されることが考えられる。ポスターの議論はその日常化した状態から出発してしまっており、メディアが登場する以前と、普及した以後の両時点を比較しただけの考察となっている点で、現実性を欠いているのではないだろうか。

また、この「ハマリ」の考察は、双方向的・水平的な第2メディアのメディア特性を考える上でも重要になると思われる。アニメやゲー

⁶⁾このポスターの議論については、既に『情報様式論』の訳者あとがきで、室井尚・吉岡洋が批評している(『情報様式論』p.307)。その批評で指摘された身体性の問題と「言説主体」に関する問題は、本書においても残存しているが、第2メディアがポストモダンの文脈で果たす役割の「具体的な展望」の問題については、第2・3論文で展開されている。

⁷⁾この「感覚的・身体的な体験」は、高橋由典『感情と行為』(1996)の「体験—選択の世界」の体験、つまり言語では表せないような感情的な体験に相当すると考えられる。

ム、スポーツ、音楽、社会運動などに「ハマ」ってしまった人が、さらにそれについての会話を、電子メディア上の「サイバースペース」で楽しんでいる。つまり、最初の「ハマ」を共有する人々が、さらに会話をして「ハマ」っているのである。これは、アニメ・ゲームなどの登場人物の格好をするコスチューム・プレイや、既存のマンガ・アニメ・ゲームなどから作り出される同人誌と同じ構造である。さらにこの「ハマ」は、アニメー同人誌・インターネットでの会話と、幾重にも重なり合う可能性を持つ。インターネット上のWorld Wide Webや諸ニュースグループは、こうした二重三重の「ハマ」の構造から成り立っていると考えられる。

問題点の第2点としては、電子メディアが「主体を解体するもの」として一般的に語られており、その相違が軽視されていることが挙げられる。実際の電子メディアは、個々のアプリケーション＝ソフトによって大きく特性が異なる。我々は、目的に応じてこれら多様な電子メディアを、また活字メディア、音声メディアとを使い分けている。主体形成を問題とする場合、これらの「すみわけ」「使い分け」「配置」をみることは重要であろう。

第1点・第2点を総合すると、ポスターの議論には、メディア環境を創出・再生産し、そこで生きるという諸実践についての視点が欠落している、といえる。主体形成を問題にするポスターは、こうした議論にはそれほど関心がないのかも知れない。しかし、この身体・感情レベルの議論、また諸実践の分析はポスト構造主義の視点と相補的なものであり、ポスターの議論をさらに重層的なものとする、と思われるのである。

参考文献

- 今田高俊編『ハイパー・リアリティの世界』有斐閣、1994
 大澤真幸『電子メディア論』新曜社、1995
 Poster, Mark "The Mode of Information: Poststructuralism and Social Context", Cambridge: Polity Press, 1990＝室井尚・吉岡洋訳『情報様式論』岩波書店、1991
 「週刊読書人」第2141号、1996年6月28日
 高橋由典『感情と行為』新曜社、1996

(むらかみ こうすけ・修士課程)